

# 遊歴雑記の眺望景観描写における特徴

－視距離と遠近の分析－

Characteristics of Descriptions in Landscape Viewing in the "Yureki Zakki"

-- An Analysis of Viewing Distance & Perspective --

尾 藤 章 雄

BITO Akio

# 遊歴雑記の眺望景観描写における特徴

## — 視距離と遠近の分析 —

### Characteristics of Descriptions in Landscape Viewing in the "Yureki Zakki" -- An Analysis of Viewing Distance & Perspective --

尾 藤 章 雄

BITO Akio

キーワード：遊歴雑記 文化文政期 風景観 景観把握モデル

**要旨：**江戸時代の文化文政期の1814（文化11）年に小石川の元住職である十方庵敬順が執筆した遊歴雑記について、景観把握モデルの考え方に基づき、測定した視距離とその対象の描写内容とを比較検討することにより、作者の抱いていた当時の風景観の特徴を明らかにした。台地面からの眺望景観と、低地・水辺からの眺望景観に大別して分析した結果、遠近に寄らず対象となった場所の地名を正確に把握している一方、その方向には幾分の錯誤があること、遠景域から中景域、近景域へと順序だって描写されることで風景の奥行きが強調される場所と、異なる景域を行き来する描写によって幾方向にも展望が開けていることが強調される場所があること、対象場の広がりや海浜で40kmから台地面で4km程度であること、作者の意図で一部の描写に誇張や実際とは異なる表記がなされている可能性があること、異なる地形面が接して起伏ある風景が一望できる場所の評価が高いことなどが明らかになった。

#### 1 遊歴雑記の風景描写

遊歴雑記は1814（文化11）年に完成した地誌書である。作者の江戸小石川、小日向水道町（現東京都文京区小日向）にある生西寺の元住職、十方庵敬順（じっぽうあんけいじゅん；以下作者）が、逍遙を兼ねて江戸市中や近郊を訪ね歩く中で、様々な事柄を事細かに書きとどめたものである。

ほぼ同時期に書かれたものとして官製の地誌書である新編武蔵風土記稿がある。風土記稿が江戸近郊の寺社を中心に、箇条書きを基本に統一した書式によるのとは対照的に、遊歴雑記は寺社以外の名所旧跡も含めて歴史的背景・由来、寺社の位置や建築物の造り、さらに、作者の住まいがある江戸小石川からそこまでの道中の様子、行き会った人々、交わされた会話、茶店で出された茶菓子、土産物など多岐にわたる内容が書かれている。何よりもその描写の中に、作者の主観に基づいた解釈・感想・評価、思いなどが忌憚のない表現で綴られており、文化文政期の、風情を解する一人の江戸の茶人の抱いていた、本音としての江戸の風景観を知ることができる優れた資料となっている。

筆者はかねてより、この遊歴雑記の風景描写に着目してきた。尾藤（2014）では、風景描写のうち眺望景観が特に高い評価を得ている、神田川沿いの下高田村東山藤稲荷と富士見茶屋珍珍亭について、当時の地形条件を復元してその特徴を論じた。また、尾藤（2015, 2017）においては、同様に眺望景観が高い評価を得ている江戸近傍の34カ所について、その描写に用いられた語を抽出して分類・整理し、あわせて地形条件との関係性を明らかにした。さらに尾藤（2020）では、それらの場所を視点場として分類し、眺望景観の構図と、その場所の評価を高めた要因に言及した。

これらから、文化文政期において眺望景観が高い評価を得た場所とは、周囲よりも比高が高いか開

けている場所であり、山、水辺、樹林、花といった自然的なもの、集落、農地、町家といった近傍に存在する人文的なもの、そしてそこに様々に展開する人々の振る舞いという3者を含むことを基本的枠組みとして構成されていることが明らかになった。

本稿ではこの遊歴雑記に見られる風景描写の特徴について、景観把握モデルの考え方に立ってさらに定量的に分析することにした。すなわち、描写の中で視点場と対象が具体的に明示されているか、或いは後者が想定可能で、両者の位置関係が判明するものについて、両者間の視距離と描写内容とを比較検討することによって、その特徴を遠近という点から明らかにした。

## 2 景観把握モデルの導入

最初に景観工学の分野で明らかにされている視点、視点場、対象、対象場、および本項の分析に用いた視距離について触れておきたい(図1)。

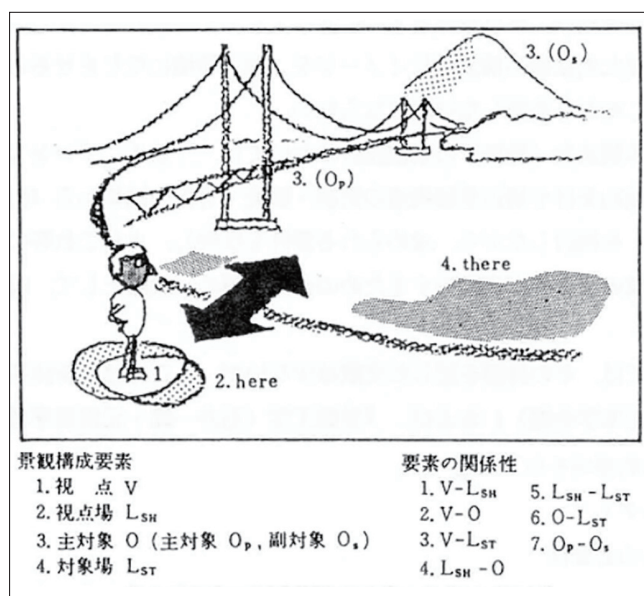


図1 景観把握モデル (篠原, 1998)

対象として詳しく描写される。そして描写された対象が複数ある場合に、それらの分布から、景観の対象場が明らかになる。

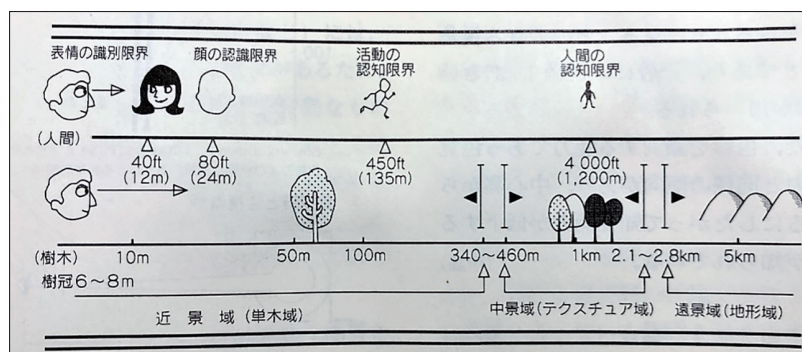


図2 景観における視距離の分割 (篠原, 1998)

とした。近景域は樹木であれば1本1本の葉、幹、枝振りなどの樹木の特徴がわかる領域である。次にこれ以遠2.1-2.8kmまでを「中景域」とし、うち1200mまでを人の存在が認知可能な「人間の認知限界」とした。中景域は樹木であれば樹冠6mないし8mの樹群のテクスチャ(肌理; きめ)が視角

景観現象を分析する立場で作られた景観把握モデル(篠原, 1998)によると、視点とは景観を眺める人の位置、視点場はその近傍の空間を指す。また、眺められる対象群の中には、その景観の性格を規定し、他の対象を景観的に支配している対象があり、それを主対象(さらに二次的な影響力を持つものが存在する場合には副対象)とする。そして、視点場と主(副)対象を除いた、すべての対象(群)によって対象場が構成される。

遊歴雑記の作者が高台にある寺社の境内から周辺を眺望している場合を例にすると、作者の立ち位置が視点で、その寺社の境内は視点場、そして、そこから見える様々なものの中から、作者の主観、おそらくは風景観にあたるもの、に基づいて取捨選択されたものが

ここで視距離とは、視点から対象までの距離をいい、対象の見え方を大きく左右する。篠原はこの視距離について、人間と樹木を標準対象とした分割法を提示している(図2)。これによると、視点からおおよそ340-460mまでを「近景域」とし、うち135mまでを人の活動が認知可能として「活動の認知限界」



によって定められる領域である。これより遠くは「遠景域」として、大きな植生分布の変化がわかる程度で稜線などの地形のアウトラインが際立つレベルとした。

遊歴雑記の作者を始め江戸期の人々の、風景を見る際の視知覚特性（視野、視界、視力）が現代人と大きくは変わらないものとすれば、風景描写の中に示された視点場と対象との間の視距離を実際に測定して、上記の景域の考え方と描写内容とを比較することにより、遊歴雑記の風景描写にみられる特徴が遠近という点から定量的に明らかになる。以下では視距離と大きな関係性を持つ地形条件に注目し、台地面に位置する視点場からの眺望景観と、低地・水辺に位置する視点場からの眺望景観の2つに大きく分けて検討した。

### 3 台地面に位置する視点場からの眺望景観

#### (1) 神田川谷底と農村を眺望する

初編上巻18の「富士見茶屋珍々亭の眺望（現：学習院大学構内、豊島区目白1丁目）」の富士見茶屋については尾藤（2013）でも地形条件との関係を検討しており、ここでは改めて迅速図を見ながら

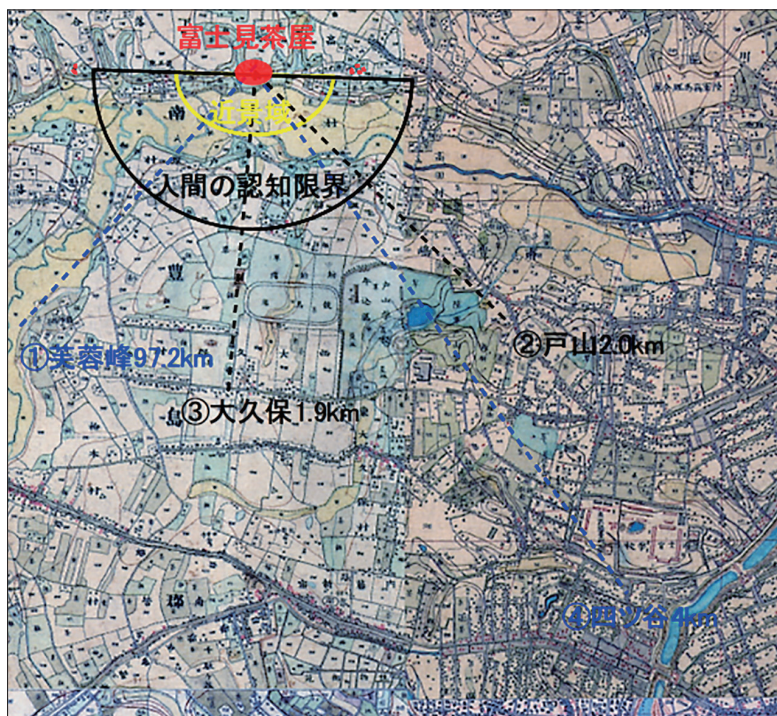


図3 富士見茶屋からの視距離（迅速図上に加筆 以下同じ）

視距離との関係を見る。江戸市中から西に離れた近郊農村にあるこの富士見茶屋は、東西に流れる神田川の谷底を見下ろす北側台地面上にある。すぐ西側に支流が台地を刻んで小さな谷を形成しており、台地面からは南西に比高20mほどを下って谷底に至る道がある。富士見茶屋からは南方向にある台地斜面を広く見わたすことができる。

ここでの描写は「此處高き事六七丈、此茶店より真正面に、能芙蓉峯を見ること相對するが如し、・・・その外東西南一里ばかりの間、遠山又は農田を眺望し、或は和田戸山につづきて、大久保より四ツ谷の果迄、遙に松杉の天然に屈曲して、霞を帯し様藁屋の

棟のやはらか成田を打畑を耕し、幽に人の行かふ風情實に一瞬千里の美景は言語にたえ筆端に盡しがたし、・・・」とある。

富士見茶屋を視点場として、描写に挙げられた各対象までの方向と視距離を迅速図上に加筆したのが図3である。青色で示した地名と点線は遠景域の対象、黒色で示した地名と点線は中景域の対象である（以下全図に共通）。視距離は富士見茶屋から各対象までの直線距離とし、地理院地図のツール（計測）を用いて測定した。なお、対象が農業集落で特に明示が無い場合、農業集落内の中心に位置する神社、或いは主要道の交差点までの距離を計測している。また、各対象につけられた①～④の番号は、風景描写の中で挙げられた地名の順序を示している。

迅速図は遊歴雑記が書かれてから約70年を経た1886（明治19）年に、当時の明治政府の指示の下、大日本帝国陸軍参謀本部陸地測量部により完成された地図である。本稿では国土地理院発行の2万分



の1迅速測図を複製の上、農研機構農業環境変動研究センターがWEB上に公開している「歴史的農業環境閲覧システム」を利用した。以下の図は、各視点場周辺を対象場の広がり方を考慮しながら抽出し、画像を見やすくするためにフィルター処理を施したものである。文化文政期から明治期にかけての70年間の江戸～東京の土地利用の変化は小さくないが、迅速図では地形条件が等高線や段彩などにより明瞭に示され、また明治初期ながら土地利用を正確に表現しているという点で、本稿の風景描写の分析に参考にできるものと判断した。図の富士見茶屋周辺をみると、周辺の台地面上には農地と林地が、そして神田川の谷底には田が広がる長閑な農村風景が展開していたことがわかる。

芙蓉峰（富士山）は富士見茶屋から南西方向にあり視距離は97.2km、遠山は手前の丹沢山系か多摩丘陵が想定される。いずれも遠景域にあるため稜線など地形のアウトラインが認知できるのみであろう。和田戸山、大久保、四ツ谷などの集落はいずれも富士見茶屋からは南から南東方向にあり、大久保までは1.9km、戸山は2km、四谷は4kmと中景域から遠景域にある。図中に黒い扇型で示した「人間の認知限界（視点場から1200m）」を越えるため、藁屋の棟は認知できようが、田を打畑を耕し、といった人の活動までは難しい。おそらくはこれら農業集落にある藁屋と田や畑といった農地が識別できたと考えるべきだろう。富士山を除くと、富士見茶屋からおおよそ4kmの範囲が見わたせているので、これが富士見茶屋における対象場の広がり方と解釈することができる。

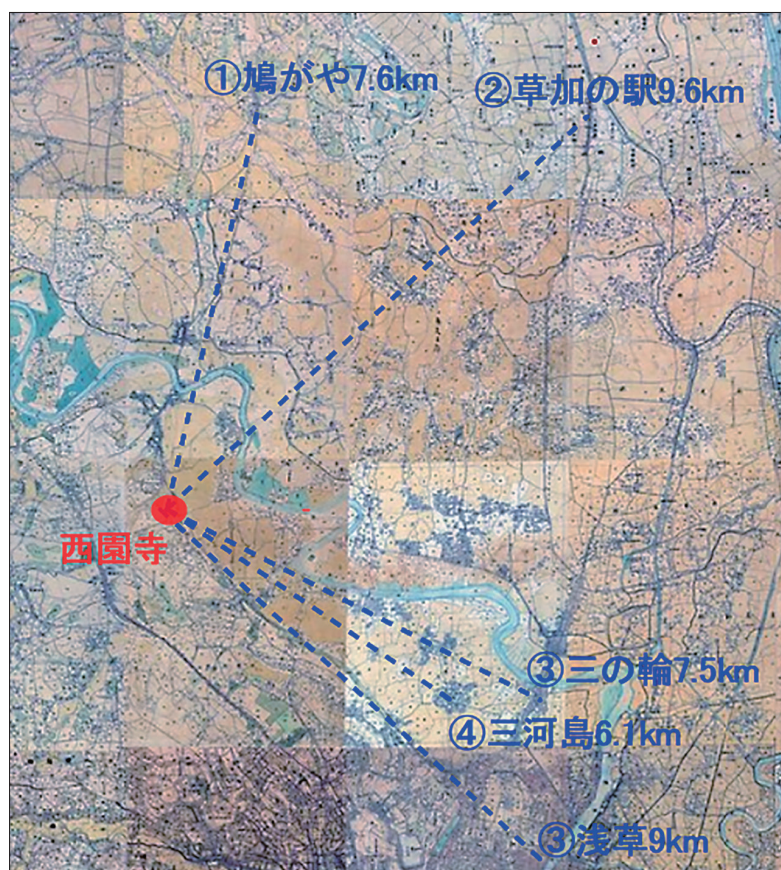


図4 西園寺からの視距離

松杉の天然に屈曲するなど、樹木の細かな特徴がわかる領域は近景域（図中に黄色実線の扇型で示した範囲）に限られ、また、人の行きかう様子を認知できるのは「人間の認知限界」までと想定される。図の扇型からもわかるように、富士見茶屋からでは、神田川の谷底から南側の斜面すぐの諏訪集落あたりまでとなろう。

以上から富士見茶屋からの描写を視距離の点から再構成すると、富士山と遠山の稜線を背景として、中景域以遠にある集落や農地、そして神田川の谷底から諏訪集落あたりまでにいる農夫が田や畑を耕す様子、人が行きかう様子が見えており、さらに近景域には松や杉の屈曲する良い枝振りが見えているという構図になる。風景描写の中に、実際の視距離からは説明できない部分があるのは、強調したい対象を選んでいく中で、

一部が誇張されて描写されている可能性も指摘できる。全体としてこの富士見茶屋では、遠景域（芙蓉峰、遠山）から中景域（藁屋、農地）そして近景域（人、松杉）へ、自然的なもの（山）から人文的なもの（藁屋、農地、人）へ、さらに動かないもの（藁屋、農田）から動くもの（田を打ち畑を耕す、人の行き交う）へという順序で、クローズアップしていく点が特徴として挙げられる。



## (2) 大川低地の農村と町家を眺望する

二編中巻42の「十條村西園寺の風景眺望（現：西音寺と同定 北区中十条3丁目）」の西園寺は、迅速図によると武蔵野台地の中の上野台地（松田，2008）の東縁にあり、東側の崖下に流れる大川（隅田川）とその低地を広く見わたすことができる。新編武蔵風土記稿で同じ場所の記述に「東ノ方ヲ望メハ、近郷ノ田園ヲ見ワタシ又遠クハ筑波日光ノ山々ヲ望ミテ最佳景ト云ヘシ」とあり絶景の地として知られる。

低地との比高については「六、七丈の崖上の寺の座敷から眺望」とあり、現在もおおよそ16mある。ここでの描写は「・・・一事として目にさわるものなく、西は鳩がやの方より北は草加の驛の裏手、千住三の輪浅草、近くは三河島の邊まで悉く一望の中にありて、風色奇々妙々にして絶景いふばかりなし、・・・」とある。図4に青い点線で示したように、北北東方向にある日光御成道の鳩ヶ谷宿までの視距離は7.6km、北東方向にある日光街道（奥州街道）の草加宿までは9.6km、それぞれ西、北とされているが北方向が上に描かれている迅速図上の位置関係とは合致しない。さらに南東方向の千住三ノ輪は千住宿の南側にあり7.5kmと水田の広がる農村の中にあり、南東方向にある市中の浅草まで9km、三河島までも6.1kmとすべては遠景域にある。この西園寺の描写では、農村部（鳩ヶ谷、草加）が先で次に市中（千住、三ノ輪、浅草）、そして最も近い三河島が最後に挙げられているが、挙げられている対象はすべて遠景域にあり、その順序は明確ではない。視距離に基づいて推定すると、西園寺から東側およそ10kmの範囲が見わたせており、台地の縁辺部にあるという視点場のためか、その対象場はとても広いことがわかる。



図5 牛天神からの視距離

いに繁華な町家が連続している（図5）。

ここでの描写は「南は飯田町より小川町神田橋の邊迄見晴し、又西の方は目白臺、早稲田、高田、大久保の邊より、近くは赤城、築土、江戸川筋を人の往来するまで、一望の中に有て風景いはん方なし、・・・」とある。飯田町、小川町、神田橋はいずれも南方向にあり、飯田町は視距離900m、最も遠い神田橋までは2.6kmでいずれも中景域にある。目白、早稲田、高田、大久保は神田川の上流の集落で牛天神からは西方向にあり、最も遠い高田村で視距離は3.9km、大久保村で3.5kmと遠景域にある。赤城と築土は近くそれぞれ視距離は880mと1.48kmでやはり中景域にあるが、江戸川筋は280mほどと近景域になるので黄色の点線で示している。南の市中の方が、西の集落よりも相対的に視距離

## (3) 江戸市中の町家と農村を眺望する

初編中巻7の「小石川天神の景望（現：牛天神北野神社 文京区春日1丁目）」の牛天神は、武蔵野台地の中の豊島台（松田，2008）の東縁で旧江戸川（神田川）の左岸、江戸城外堀の北側にあり。迅速図によると江戸川の谷底との比高はおおよそ10mあり、西北方向から南、及び南東方向まで市中を広く見わたすことができる。江戸川に沿って目白方面や神齡山悉地院護国寺に至る道が走り、江戸名所図会の絵では、川沿

が短くなっているのは、ランドマークが多く、作者の家からも近いので町名などを熟知しているためかもしれない。

全体としてこの牛天神の描写では、南方向の市中の中景域、西方向の農村集落の遠景域、そして再び市中の中景域にある赤城、築土、最後に眼下の江戸川筋へと次々と目を転じていることになる。方向や遠近に特に順序があるとは思えないが、市中と農村との対比を強調しながら、双方が同時に見わたせる面白さと対象場の広さを強調している可能性はある。およそ4kmの範囲が見わたせているので、富士見茶屋と同じようにこれが台地面からの眺望における対象場の広がりともみることができる。

#### (4) 街道筋から丘陵を眺望する

三編中巻62の「向が岡の風景（現：府中市）」は、甲州街道の府中宿を東に、すなわち江戸に向かう方向に出た所にある茶店からの眺望である。迅速図からもわかるとおり、府中宿は標高50m前後

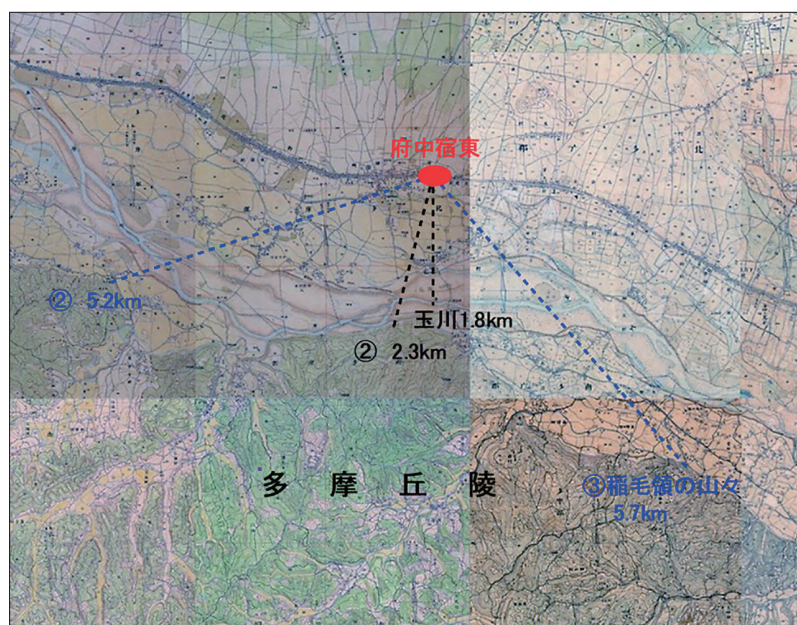


図6 府中宿東からの視距離

にあるが、南側を東西に流れる玉川（現：多摩川）の谷まで緩やかな斜面に農地が広がり、玉川を挟んで南岸には多摩丘陵が広がっている。ここでの描写は「おのく玉川を越えて實に連山波濤の如く、その見る處至て遠きにもあらず、又近きにはあらで程よく眺望する風景奇々妙々たり、……。その外稲毛嶺の山々悉く見へずといふ事なし、誠に天造の絶景に……」とある。

多摩丘陵は多摩川から南へ10kmほど続く大きな丘陵であるため、府中宿東からは山が幾重にも連なり、連山波濤の如くという表現に繋がっている。特に対

象が具体的に挙げられていないので、図6では視点場から見える丘陵の中のピークとして、南西方向（視距離5.2km青い点線）と南方向（2.3km黒い点線）を例示した。玉川の流路までは、最も近いところで1.8kmある。稲毛嶺とは当時の橘樹郡北部、現在の川崎市多摩区北部あたりを指し、多摩丘陵の南東方向、すなわち川の下流方向にあたり、視距離は6.3kmほどになる。この府中宿東からは、多摩丘陵が川を挟んで中景域から遠景域に広く見わたせることがわかる。「遠きにもあらず、又近きにはあらで程よく」という描写があるが、その対象が「その見る處至て」とされているところから、主に玉川と丘陵までの距離について述べたものと考えてよいだろう。

#### 4 低地・水辺に位置する視点場からの眺望景観

##### (1) 川沿いの高台から川の両岸を眺望する

初編中巻19の「待乳山聖天の景望（現：待乳山聖天 台東区浅草6丁目）」の待乳山聖天は大川（現在の隅田川、この付近で宮戸川とも呼ぶ）に沿って浅草の北側の比高9.7mの小さな丘の上にある。このすぐ北側で大川の支流の今戸川が北西方向から合流しているが、これら川の堤以外に付近に地形的な高まりはないため、比高は僅かであるにもかかわらず川沿いを広く見わたすことができる。



迅速図を見るとこれより南方向の浅草あたりからは市中となり、このあたりが城下から続く連続した町家の北限になっていることがわかる。

ここでの描写は「・・・市中に獨立して高さこと三、四丈、堂の脇なる茶店に憩ひて、東北の方を眺望すれば、隅田堤を人の行通ふ様、又宮戸川を帆懸て舟の走る風情、町家の棟くを打越て手に取如く、末は綾瀬川の土手迄、一望の中に有て風景言語に絶たり、・・・」とある。隅田堤も綾瀬川の土手も、対象としてピンポイントでは確定できないので、視点場からの構図を想定することで図7のように視距離の測定を行った。隅田堤は大川の堤であり、待乳山聖天の位置する右岸側の堤なら視距離200m、対岸側の堤とすれば530mである。いずれであっても人の行き通う様子を認知できる「人間の認知限界」の範囲内にある。また、川面に舟が走る様子も、川の中央に見えているとすれば270mほどですべて近景域にある。町家の棟を打越で、とあるので、眼下にある町家越しに大川とその堤を見るという構図である。一方で綾瀬川の土手は上流側の対岸で待乳山聖天からは視距離2.7kmほど離れており、中景域として土手の形状や植栽が識別できる程度であろう。

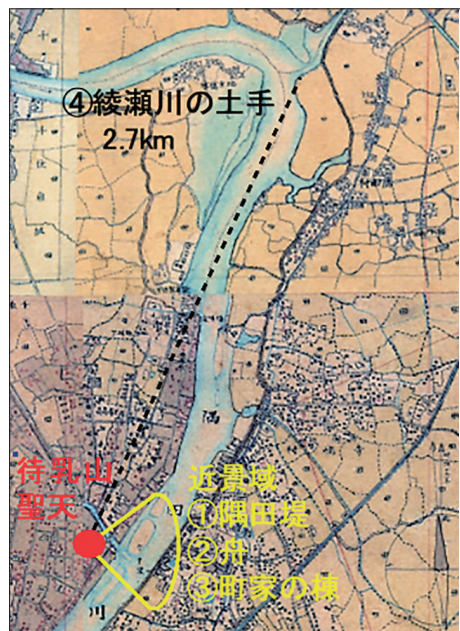


図7 待乳山聖天からの視距離

がきくはずだが、南方向の市中や西や北の方向、さらに遠景域についての描写はなく、東側の大川に沿った対象のみが挙げられている。

## (2) 川沿いの渡し場から農村を眺望する

初編下巻38の「眞崎の稻荷渡口の風景（現：荒川区南千住3丁目）」の稻荷渡口は、種々の資料から現在の南千住にある石濱神社付近と同定した。大川（隅田川）対岸の向島までの幅300mほどの川



図8 眞崎の稻荷渡口からの視距離

渡口あたりまでは湿地（水域）が広がり、他は一面の水田である。

ここでの描写は「東面して遙かに川向ふを見れば、墨田堤を行ちがふ、又耕地遠村の打晴たる、或は遠山のかすめる、又両汀の潔よく舟舷の撃する、扱は舟持する藁屋の川向ふに詫しく見ゆるは古雅なり、・・・」とある。(1)と同様に描写の中に具体的な地名がなく、対象としてピンポイントでは

を舟が行き来する渡し場の風景である。低地にあってもこのように川沿いで渡し場が置かれていた場所は、川面の近くに人々が滞留するためか視点場となりやすく、遊歴雑記の中でも多数の描写がある。(1)の僅かに北の地点であり、大川に綾瀬川が北東から合流する地点に近い。迅速図によると、この合流点から下流の右岸、この眞崎の稻荷

確定できないので、視点場から東側の対象を想定することで図8のように視距離を推定した。この眞崎の稻荷渡口は大川右岸に接しているが、隅田堤は川向こうとあるので対岸側の堤、大川に係留されている舟の弦を川水がたたき様子、藁屋が詫しく見える様子なども、対岸の隅田村とその船着き場を見ていると想定すれば、いずれも視距離300m前後の近景域である。図では黄色実線の扇型で示した範囲である。耕地遠村が見えている範囲は、同じく川の東側で中景域までと想定して、図では黒色実線の扇型で示した。遠山については、東方向に見えている高台とすれば、視距離8.6kmほど先の遠景域に見えるのは下総台地の西端で市川あたり、青色点線で示した方向になろう。この遠景域の対象が含まれることで、(1)と同じ川沿いで比高のない視点場からの眺望にもかかわらず、対象場は視点場から東側に8km前後とかなり広くなる。

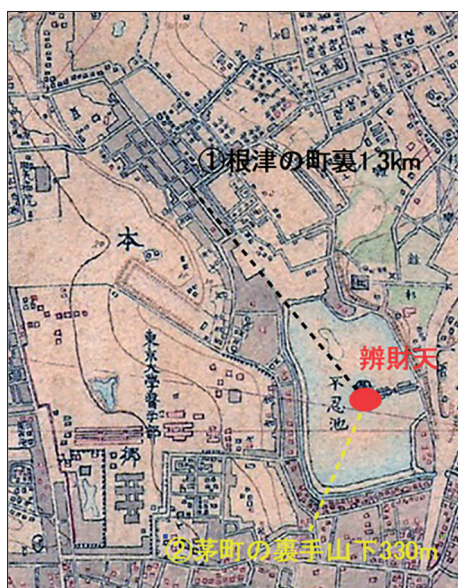


図9 不忍の池辨財天からの視距離

図9に示したように、西側に延びる本郷台地に沿って北西方向の視距離1.3kmにある根津の町家（黒色点線）から、南西方向330mほどにある茅町（現在の池之端）まで（黄色点線）の間、池の西側に沿った道を往来する人を認知できており、ほぼ「人間の認知限界」までの範囲である。池の西側について中景域から近景域へ順に見ていることがわかる。「遠きにもあらず近きにもあらず」、という描写から、作者にとってはこの池の西側の風景を特別に評価していることがわかる。

#### (4) 低地農村から街道筋を眺望する



図10 三谷玉姫稲荷からの視距離

#### (3) 谷間の池から市中を眺望する

三編中巻65の「不忍が池辨財天の景望（現：不忍池辯天堂 台東区上野公園2丁目）」の辨財天は、本郷台地と上野台地（松田，2008）の間の不忍池にある。不忍池は縄文海進以後の東京湾の縮小で取り残された入り江の名残で、上流では境川、谷田川（谷戸川）、この付近では藍染川と呼ばれる小河川が流入している。辨財天は池の中央の人工島にあり、水面に囲まれた境内から四方を見わたすことができる。ここでの描写は「北は根津の町裏より茅町のうら手山下のあなたまで、はるかに池邊を往来する人々の風情は面白く、眺望遠きにもあらず近きにもあらず風色いはん方なし、・・・」とある。

図9に示したように、西側に延びる本郷台地に沿って北西方向の視距離1.3kmにある根津の町家（黒色点線）から、南西方向330mほどにある茅町（現在の池之端）まで（黄色点線）の間、池の西側に沿った道を往来する人を認知できており、ほぼ「人間の認知限界」までの範囲である。池の西側について中景域から近景域へ順に見ていることがわかる。「遠きにもあらず近きにもあらず」、という描写から、作者にとってはこの池の西側の風景を特別に評価していることがわかる。

初編中巻22の「三谷玉姫稲荷の景地靈佛（現：玉姫稲荷神社 台東区清川2丁目）」の玉姫稲荷は浅草の真北、大川（隅田川）の西で水田に囲まれた低地にある。すぐ西を南北に日光街道（奥州街道、この付近で縄手路とも呼ぶ）が走り、迅速図によるとこの稲荷から千住の町家までの間は、一面水田が広がっている。

ここでの描写は「田の畔には摘草する徒有又田螺拾ふ人有、或は畦路を人の行通ふ、花あり芽出しの樹々あり、扱遙に北西をかへり見れば、千住小塚原より縄手路を、三谷へ往来の引きもちぎらざる、田に畑に菜の花の見事なる、その景望一く兎角の論なし、・・・」とある。摘草する、田螺拾ふ、畦道



を行き交うなど、人の細かな動きに加えて、花あり芽だしと樹木も細かく識別しており、すべて見わたすことが可能な北方向での近景域特に「活動の認知限界」にある対象と想定される。北西方向の千住小塚原（回向院）までは視距離720mと中景域であり、縄手路を近づいてくる人も見えている。図10に示したように、近景域から中景域へと、いずれも人の動きを追う順になっている。東方向の大川沿い、南東方向の浅草なども見えているはずだが、描写には挙げられていない。

#### (5) 神田川谷底から農村を眺望する

三編下巻2の「上落合村おたき橋堰道の風景（現：新宿区高田馬場3丁目中野区東中野5丁目）」のおたき橋とは、江戸城の西ほぼ一里、神田川が石神井川と合流する点から南に500mほど上流にかかる橋である。台地面と神田川の谷底の比高は10mから15mある。おたき橋の堰道の風景という題目であるが、堰道とは田の畦道を意味する。迅速図ではおたき橋周辺の台地面上はすべて畑地であるため、この堰道とはおたき橋のかかる谷底の道に限定される。すなわちここでは橋からの描写として「南は大久保より四ツ谷中野邊を一圓に眺望し、北は富士見の臺に續きて椎名町の裏手の山々、西は落合村の立場よりうねりて坂へ上るさまは・・・優に面白く東をかえり見れば、高田より諏訪村へ續て、明神の森の木立の夕陽にうつろふ風情、またおたき橋の川筋は、渚の綺麗に長流のいざよきは目覚めるこゝちせられ、此川筋に鮎釣らんと汀に敷物して、水中を見入りたる人の風俗も又一品あり、或いは耕地の中路の徒來する男女に至る迄、右に左に風色天然にして畫くとも及がたし、・・・」とあり、橋から南、北、西、東方向の順に目を転じながら見ていることがわかる。図11の迅速図によると、このうち南方向と北方向は神田川の谷が伸びるので谷底に沿って見わたせるが、西方向と東方向はすぐに台地斜面となり、台地面の上に上らないと見わたすことが難しいことがわかる。村の西端が谷にかかる大久保は橋から視距離1.3km、また、中野もさらに南1.8kmほどにあって青梅街道に沿う町家が谷を横切っている。富士見の台地は北方向、石神井川との合流点の先に見える台地面を指しており視距離はおおよそ870mほどだが、その富士見の台地面上にある椎名町は1.9kmも先で橋からは見えない。描写の通り、椎名町付近にある裏手の山々が認知できるだけであろう。これらはいずれも中景域にある。西方向については橋を渡ってすぐ、落合の農業集落に向けて道がうねりながら坂へ上って行く様子

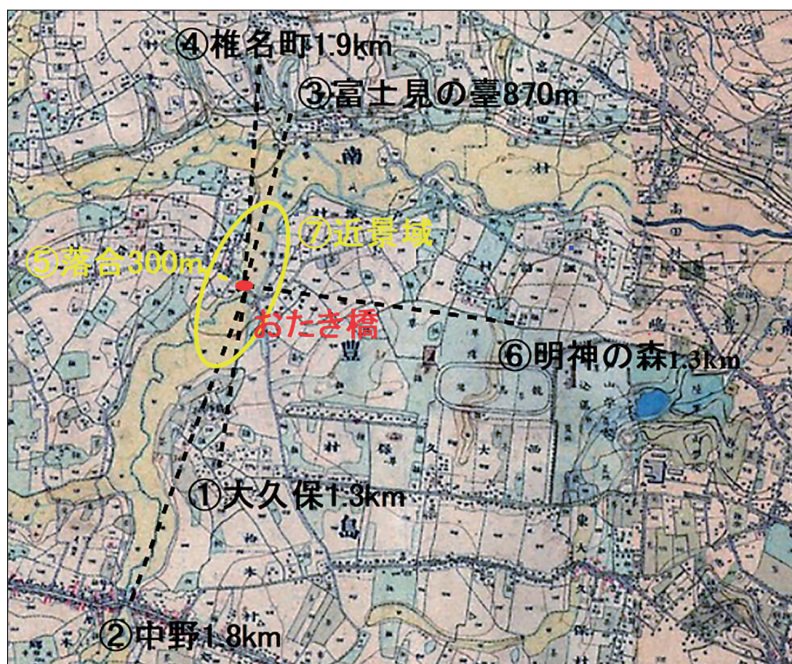


図11 おたき橋からの視距離

子は見えているだろうが、東方向の高田、諏訪は台地面にあるため橋からは見えないはずである。川筋の描写として渚の綺麗な様子、鮎釣りに来て水面を覗く人の様子、そして耕地の中の道をこちらに向かってくる男女の様子などは、その細かな動きを認知している点から「活動の認知限界」の範囲内にあり近景域と想定される。図では黄色の範囲で示している。このおたき橋の描写は、中景域の近いものから遠いものへ、そして中景域から近景域へという順序が明確である。一方で台地面の上からしか見えないはずの東方向にあ



る高田、諏訪と諏訪集落にある明神の森の木立の夕陽まで細かく描写され、橋からの眺望として織り交ぜられていることは、一種の誇張と解釈することも可能であろう。

なお、この記述の後に「只うらむらくはおたき橋より落合村の人家迄縄手の間わずか壹町餘なり、今少し當所の暇道の長くは左右の打ちはなれし、眺望の遠きにもあらず又近きにもあらねば、程よく風色一入なるべきに、・・・」という描写がある。これは、「橋を挟んだ谷底の道が実際の一町（109m）よりもっと長く、左右の台地までも、もう少し離れて見わたせて、眺望が遠くも無く近くも無ければよかったのに」という意で、作者はこの神田川の谷がもう少し広く、東西に開けていることを望んでおり、作者の当時の風景観をよく示していると思われる。阿部（2012）は遊歴雑記における耕地の描写について検討し、農夫が耕地を耕し、又田畑の畦道を往来する様を面白し（めづらしい）と表現していることに注目している。特に近景域の描写の中に、畦道に人の行き交う、行き違う、往来する様子が多く描写されていることから、作者の求める風景の構図に人の動き、ここでは農地・農夫が重要な役割を果たしていることがわかる。

#### （6）海浜から江戸の湾岸を眺望する

初編下巻39の「深川洲崎辨天の景望（現：洲崎神社 江東区木場6丁目）」の洲崎弁天は、深川の東の木場に接する江戸湾奥で、迅速図ではまさに海浜の波打ち際にある。遊歴雑記の書かれる直前の1791（寛永3）年に津波を受けて大きな被害を被ったことから、幕府がこの洲崎弁天周辺の居住を制限し、東西およそ8町に渡り荒野のままになっているとの記述がある。

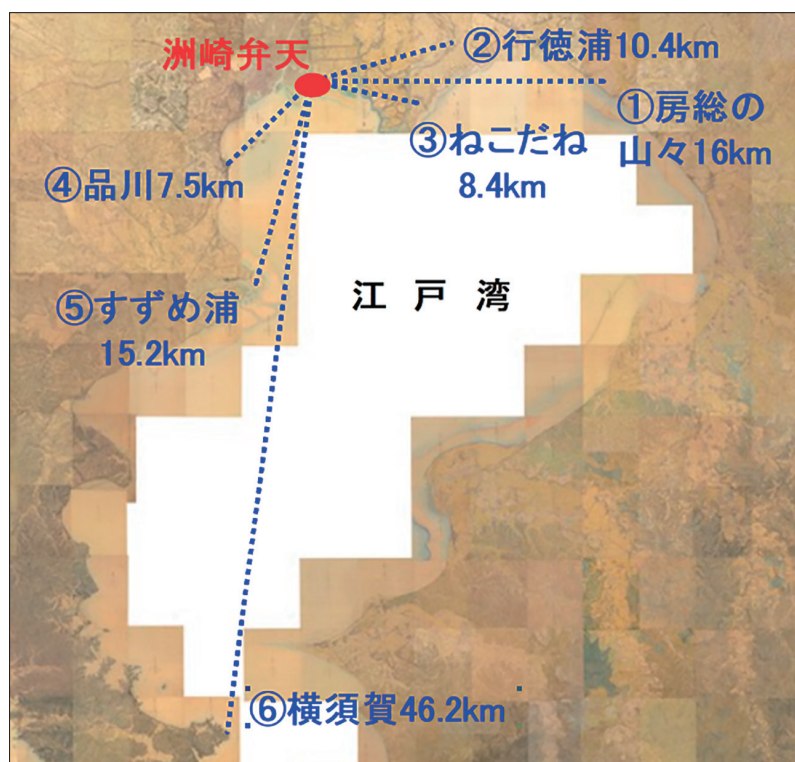


図12 洲崎弁天からの視距離（近景域の対象は省略）

ここでの描写は波除堤の下通りの茶店からのもので「・・・、依て援（旧字体右のみ）に憩うひ海上を眺望するに、眞の眞南なれば遙に房総の山くを見、東は行徳浦より、堀江、ねこだねの洲崎をながめ、西は芝浦より高輪、品川は手にとる如く、又河崎の驛より南へ出ばりたるはすゞめ浦、横須賀とかや、あるひは沖に魚獵する舟、又は磯端に鳴や千鳥の求食もめづらしく、・・・此地の里童の干潟にあそび狂ふも又一佳興たり、総て景望の風色飽ざるの海濱也、・・・」とある。図12をみると多くは海側に広がる対象

である。東方向に見える房総の山が下総台地の西端で船橋あたりと想定すれば視距離は16km、同じく東方向にある本行徳は10.4km、堀江ねこだね（現浦安市猫実）は8.4kmである。また、南西方向となる品川宿は7.5km、南方向のすずめ浦は川崎の多摩川河口に出た砂州を指して15.2km、さらに横須賀（観音崎）までは46.2kmと、すべては遠景域にある。いずれの対象も稜線のアウトラインや町並みをかすかに捉えられるのみであろう。

津波のために周囲に住居が建てられていない海浜からの眺望なので、陸側も含めて視界は開けており、遠景域の中でも遠い房総の山から近くの町へ、次は逆に近くの品川から遠くの横須賀へという順序が明確である。

さらに後半では、舟、鷗や千鳥、里童の様子が細かく認知される近景域であり、前半の遠景域の対象との対比を際立たせることで、海浜からの眺望の奥行きが大きく、対象場が際だって広いことが示されている。おたき橋と同様に近景域の水辺における人の描写は、作者の思い入れからか大変細くなっている。

## 5 異なる視点場からの風景描写にみられる特徴

ここまで台地面に位置する視点場からの眺望景観、低地・水辺に位置する視点場からの眺望景観に大別した上で、それぞれ4箇所、或いは6箇所の異なる風景描写を検討した。最初に述べたように、いずれも眺望景観が高い評価を得た場所であり、描写されている対象と視点場との位置関係を、一部に想定を含めて明確にすることによって視距離を測定し、遊歴雑記の描写と比較した。以下に特徴をまとめてみよう。

まず挙げられている対象までの距離、高低差がある場合の比高、そして地名などの表記が実に正確であることが指摘できる。測量図がない時代に、作者の住む江戸小石川から徒歩で、相対的な位置関係を見失うこと無く移動できていることは驚きに値する。この文化文政期、江戸市中の名所旧跡を巡る案内書や絵地図に当たるものは数多く発刊されており、それらを参考にして目的地までの道を辿った可能性はあるが、眺望した先に見える山、宿場、町、そして農村集落の名称までを間違いなく把握していることは、作者の並外れた地理観を物語るものである。一方で描写に使われている方向は東西南北の4方位のみである。遠景域の対象について、例えば図4の西園寺において、実際に鳩がやは北北東、草加の駅は北東方向になるが、それぞれ西、北方向とされるなど、迅速図とは明確なずれがあることも指摘できる。視点場から対象までの相対的な方向については、正確に把握できていない可能性が指摘できる。

視点場からの視距離に応じて近景域、中景域、遠景域の3つに分けて検討したが、描写の中で挙げられている対象が、遠景域から中景域、そして近景域へと順序だっている場合があり、各景域の中でも遠い対象から近い対象へと順序だっているものもあれば、その順序がはっきりせず、異なる景域を行き来する場合がある。前者は視点場からみて遠くから近くへと次第にクローズアップしていくことにより風景に奥行きがあることが強調される一方で、後者は視点場からあちらこちらに目を転じていることから、幾方向にも（或いは四方に）展望が開けていることが強調される。さらに、挙げられている対象の分布を知ること、各視点場から見た対象場の範囲を推定することができた。州崎弁天の海浜の視点場が最も広く40kmを超え、台地面から低地を見下ろす西園寺ではおよそ10km、台地面から神田川、江戸川の谷底を見下ろす富士見茶屋と牛天神ではおよそ4km程度であることがわかる。

一方で対象場が狭いのは低地の視点場である。おのずと近景域の対象が多くなるので、具体的な地名、集落名ではなく、農地などの土地利用、川筋との関係、視点場からの方向でその位置が示されるものが多くなり、本稿でも想定による部分が多くなった。しかしながら眞崎の稲荷渡口のように、近景域だけでなく遠景域にある房総の山々を対象に含めている場合には、対象場が広く見わたせていることを示唆する効果もある。

中景域から近景域にかけては、人や人の動きが対象となって細かく描写される場合が多いが、中景域では「人間の認知限界」、近景域では「活動の認知限界」という篠原（1998）の定義と照らし合わせると、描写に幾分の誇張や実際とは異なる表記がなされている可能性が指摘できる。富士見茶屋やおたき橋からは、人や樹木といった作者の特に強調したい対象について、視点場からは実際に見えて

いない、例えば地形面の高低差から見るのが難しいと思われる場合でも、近傍の視点場からの見え方を織り交ぜて描写しているのである。

さらに、例えば西園寺の西方向には、同じ風景が広がる三谷玉姫稻荷で描写されている一面の水田、北方向には千住宿の町並みが見えているはずであり、不忍が池弁財天からは南東方向に上野御徒町の町並みが広がり人の往来もみえているはず、また州崎弁天からは北方向の内陸にひろがる一面の水田、西方向の江戸城下の町並みなどが見えているはずであるが、一切描写されていない。視点場からいろいろな方向に眺望が開けている場合でも、そのすべてを描写するのではなく、作者の特に注目する方向・セクターにある対象に絞って選別されていることは明確である。この傾向は水辺の近景域の描写において顕著で、人の動きに関わる描写が何よりも中心となっている。遊歴雑記では他にも作者の水辺への憧れが表出していると思われる描写があるが、対象を選ぶ際にも、同様の傾向が感じられる。あわせて、多くの風景描写に共通するのは、順序は明確で無くても遠一近の対比と、そこにある自然的・人文的な対象の対比が明確なことである。この対比が可能な対象を多数挙げることができ、それらが一幅の絵画のように同時に、そして一望の下にみえている場所こそが、遊歴雑記の作者の好む風景描写の根幹をなす特徴であると言って良いだろう。

最後に、「遠くも無く近くも無く」という描写に代表される、作者の持つ風景観についてみよう。この描写があるのは、辨財天の「眺望遠きにもあらず近きにもあらで風色いはん方なし」、府中宿東での「その見る處至て遠きにもあらず、又近きにはあらで程よく眺望する風景奇々妙々たり、・・・」、おたき橋での「眺望の遠きにもあらず又近きにもあらねば、程よく風色一入なるべきに、・・・」の3箇所である。先の2つの場所では、いずれも「いはん方なし」、「奇々妙々たり」と続いており、作者にとってこの眺望景観の構図がその場所の評価を高めることに貢献していることが明らかである。また最後のおたき橋では、この場所の評価を高めるために作者が希望する具体的な風景の構図までが示されている。

これらの場所に共通するのは、異なる地形面が接して見えていることである。すなわち辨財天における不忍池と本郷台地、府中宿東における玉川の河川敷と多摩丘陵、そして、おたき橋における神田川の谷底と両側の台地である。対象となる要素に人が含まれているか否か、その視距離が近景域、中景域、遠景域のどれになるか、といった関係性は特にみられないが、異なる地形面が接して起伏ある風景が一望できる場所こそが、評価の高い場所になるのである。

しかも、おたき橋の描写にあるように、視点場から近く手前に見える低い地形面（ここでは神田川の谷底）にはある程度の広がりがある方が良く、それによって相対的に遠くに見える高い地形面（台地面）までがある程度離れていることが求められている。さらに、後者の地形面が、遠景域ほどに離れているのではなく、また手前の地形面が近景域のみである必要も無い。これが作者の好む「遠くも無く近くも無く」の眺望景観の構図なのである。

本稿では遊歴雑記の風景描写について、景観把握モデルの考え方に立ち、眺望景観が高い評価を得た場所の風景描写の中にみられる視点場と対象との間の視距離と、その描写内容とを比較することによって、遠近という点を含めて当時の風景観の特徴を定量的に明らかにした。作者の風景観が、当時の庶民と必ずしも共通するかどうかは明らかではないが、今まで蓄積してきた遊歴雑記に関する成果を統合する方向で、さらなる検討を続けていきたいと考える。



## 参考文献・資料

- 阿部美香,「江戸時代後期の地誌類における耕地に関する記述の比較」ランドスケープ研究, Vol. 9, 104-110, 2012
- 国土地理院,「地理院地図」(<https://maps.gsi.go.jp/>)
- 釋敬順,「十万庵遊歴雑記」,江戸叢書刊行会編,1916,『江戸叢書 第三卷～第六卷』,1814  
(国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/952977>  
～ <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/952981> 2019/09/10閲覧), 2019
- 篠原修,「景観把握モデル」篠原修編,1998,『景観用語辞典』彰国社,30-31, 1998.
- 農業環境技術研究所,「歴史的農業環境閲覧システム」, (<https://habs.rad.naro.go.jp/>), 2008
- 尾藤章雄,「遊歴雑記」にみる江戸茶人の風景観 ―風景の復元による地理学的解析―.  
山梨大学教育人間科学部紀要, 15巻, 11-16. (DVD), 2014.
- 尾藤章雄,「遊歴雑記」にみる江戸の眺望景観 ―景観記述と地形条件に基づく地理学的分析―.  
山梨大学教育人間科学部紀要, 16巻, 141-148. (DVD), 2015.
- 尾藤章雄,「文化文政期江戸市中の眺望景観についての「遊歴雑記」と「江戸名所図会」の比較考察.  
山梨大学教育学部紀要, 25巻, 93-100. (DVD), 2017.
- 尾藤章雄,「遊歴雑記」の記述にみる江戸期の風景間. 山梨大学教育学部紀要, 30巻, 81-89. (DVD), 2020.
- 松田磐余,「江戸・東京地形学散歩」之潮, 2008.